

最先端の技術で“昔ながらの医療”を

山中克郎

福島県立医科大学 会津医療センター 総合内科

在宅医療を展開している山間部の奥会津 (p.841) に車を走らせながら、こう考えた。AI (人工知能) の発達とともに、近未来の医療はどうなっていくのだろうか？ 生活の快適さを求め、大都市への人口集中が世界中で急速に進んでいる (p.844)。地域で最期まで家族と一緒に幸せに暮らすことはできるのだろうか？

エリック・トポル著『Deep Medicine』¹⁾には、AI のディープラーニングを用いた医療の変革が描かれている。パターン認識力の向上により、AI は専門医と同等の水準で、CT/MRI 画像の読影や病理診断、皮膚科診断を行うことができる。眼底写真読影による早期の糖尿病網膜症の発見、検診で撮影された胸部X線写真上の小さな肺がんの検出、自殺を精神科医以上の能力で予測することはAIを用いれば可能となる。専門医の仕事は楽になり、へき地においても医療水準を大きく引き上げるであろう。

安価で仕事が速いAI診断は、医療経済的にも利点がある。現在の画像読影能力は、100万枚以上のスキャン画像を、放射線科医の1万倍近い速度で1枚あたり1ドルの費用で分析するという。専門医は、仕事がなくなるのではなく、AIにはできない仕事にシフトすることとなる。放射線科医ならば、血管内治療への進出もその1つであろう。

パターン認識が中心となる診断はAIに任せ、



医師は患者の悩みに共感を抱き、データだけに頼らずに患者に直接触れて異常を発見することが重要となるだろう。“昔ながらの医療”が、いま見直されようとしている。私たちは、知識

がなくて診断できないことより、知識はあっても注意を向けないがために診断できないことのほうが多い。

地方では、医療従事者の数は少なく、住民は広い地域に散らばって生活している。医療施設の数も限られ、圧倒的に不利な条件のもとで医療を行わなければならない。しかしながら、大自然の中で生活し、住民から温かいまなざしで見守られながら、彼らと一緒に幸せな生活を追求する地域医療ほど楽しいものはない。ICT (情報通信技術) やAIを積極的に利用 (p.871~878) しながら行う、昔ながらの優しい医療は、地域でこそ実現しやすいのではないだろうか。

本特集で、東日本震災から10年が経ち、「福島」の医療がどう復興してきたかを見ていただきたい。地方が抱える不利な医療状況においても、いくつかの試みが実を結ぼうとしている。各地の先進的実例を示し、進化する地域医療のあり方を提言したい。

G

文献

- 1) Topol EJ.2019/ 中村祐輔 (監修), 柴田裕之 (訳): ディープメディスン-AIで思いやりのある医療を! . NTT 出版, 2020.